

## 「レンズ豆の煮物」(創世記二五・一九〜三四)

### 1 祝福

今日から旧約聖書、創世記を再び読み始めます。二年前私ども、一章一節から二五章一八節まで、アブラハムを取り上げました。その信仰の生涯を、死んで葬られるまで辿ったわけです。

今回取り上げるのはその続きです。二五章一九節から始めて二六章までの予定です。イサクとヤコブの話です。今日は最初ですから、いろいろ再確認しながら、読んでいきたいと思っています。

さて「創世記」という書名は、始まり、起源という意味です。何の始まりかといえど、「創世」ですから、世界の始まりということでしょうけれども、その本当の意味は神の救いの歴史の始まりです。神の救いのおこなわれる舞台、場として、はじめに世界が造られ、整えられたのです。

神の救いといっても、何とも漠然とした言葉です。創世記に即した、別な言葉でいえば、神の祝福です。人は暗闇の中に佇んでいます。罪と呪いのもとにあります。そこに光が照り、恵みが明らかにされます。それが祝福です。そして祝福といえど、私ども、どうしても、創世記一二章のはじめの数節を思い起こさなければならぬのではないのでしょうか。

わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る(一二・二〜三)。

覚えておいででしょうか。「わたし」とは、主(アドナイ)なる神、「あなた」というのは、いうまでもなくアブラハムです。

この啓示の言葉によって神がアブラハムに語ったのは二つです。一つは、アブラハムを、わたしは祝福するということ、そしてもう一つ、あなたによってすべての民を祝福するということでした。

つまり、アブラハムを介して、すべての民が、神の祝福、神の救いにあずかるのだというのです。この場合、アブラハムとは、彼個人を意味するだけでなく、彼に始まるイスラエルのことでもあります。イスラエルを通してすべての国民(くにたみ)が神の救いに与る、これが神の救いの計画です。

しかしこの神の民イスラエルは、そうした神の祝福をになう民として、それにふさわしく信仰と真実をもって歩んだのでしょうか。聖書が証しするのは、そうではなかったということなのです。

しかし神は、すなわち、アブラハムの神は、この民を見捨てることはなさいませんでした。その証拠が、使徒パウロによれば(ローマ一五・八〜九)、キリストがほかならないこの民からお生まれになったという事実です。それだけではありません。イ

エス・キリストは十字架にかかり、すべての人の罪をあがない、甦って、私どもをた  
とえ私どもがどんなに不信心でも義とし、神の子としてくださったのです。

いま私はきわめて簡略化した形で聖書の証しする神の救いの歴史を振り返っていま  
す。あのときアブラハムに与えられた、アブラハムを介して、イスラエルを介してす  
べての国民（くにたみ）が祝福にあずかるという約束はイエス・キリストにおいて実  
現したといつてよい。いや、そういわなければならぬのです。その神の救いの長い  
歴史の始まりのところを、私どもはいま取り上げています。

## 2 エサウとヤコブ

さて今日の箇所から、主人公は、アブラハムではなく、その子イサクです。ただこ  
れから読み進めるかなりの部分で、イサクの子ヤコブが話題の中心になることを知っ  
ておきたいと思えます。

アブラハムの息子イサクの系図は次のとおりである。アブラハムにはイサクが産  
まれた。イサクはリベカと結婚したとき四十歳であった。リベカは、パダン・ア  
ラムのアラム人ベトエルの娘で、アラム人ラバンの妹であった（一九―二〇節）。

ここに書いてあることは、すべて、すでにアブラハム物語の中で語られていたこと  
でした（二一、二四章）。

「系図」という言葉は、創世記では、目印ともなる大事な言葉です。ここでは家族  
の歴史と言い換えてもいいものです。

いくつかの情報がここから得られます。妻リベカの父ベトエルはアブラハムの親族  
です（二二・二二）。リベカの兄ラバンはこの後ヤコブとの確執を繰り広げます。彼  
らがパダン・アラム（アラム平原Ⅱユーフラテス河上流地区、ハランもその地域）に  
住んでいたということは、イスラエル民族の起源を物語っています。彼らはセム族に  
属するアラム人でした（申命記二六・五）。

ここから始まるイサクの家族の歴史は、イサクの死を伝える三五章の終わりまでつ  
づきます。

この家族の歴史は、イサクとリベカの間には、双子が生まれたことから語り始められ  
ます。双子の兄の名はエサウ。弟はヤコブです。この弟ヤコブが、イサクの家督を継  
いで、イスラエルの父祖の一人となったのです。今日の箇所二一節以下にその誕生の  
次第が、二七節以下には長子の権利を兄から買い取ったことが書いてあります。

はじめに誕生の次第です。イサクとリベカの間には、はじめ子供がありませんでし  
た。父アブラハムの場合と同じです。「イサクは、妻に子供がでなかつたので、妻  
のために主に祈った」とあります。二十年後、「祈りが主に聞き入れられて」生まれ  
たのが、エサウとヤコブでした。

リベカが身ごもっているとき、胎児が押し合うことがあり、何か不吉なことを感じ  
たのでしょうか、主の御心を尋ねるために出かけたというようなことも、書いてあり  
ます。聖所がどこにあったのか、どんなふうにして御心を知らされたのか、何も書いて

てありませんが、二つの国民が、二つの民が相争っていることを聞きます。とくに彼女の耳に忘れがたく残ったのは「兄が弟に仕えるようになる」という言葉であったと思います。そういうことがあったというのを、リベカは、ヤコブに打ち明けた形跡はありません。しかしそれが、後でそれに触れることになりましたが、「リベカはヤコブを愛した」（二八節）というヤコブへの偏った愛の背景にあったことは間違いないことです。

さて月が満ちて、双子が生まれます。先に生まれてきたのが、この場合兄です。後で生まれたのが弟です。それぞれ名前が付けられます。兄は、生まれてきたとき赤かった、褐色をしていたとか、毛皮の衣を着ているようだったという理由で、エサウと名付けられます。ただし、これはエドムの地名と関係があつて、パレスチナ南部に住む人の先祖と考えられています（三〇節）。弟は、きわめて特徴的なことに、兄のかかをつかんで出て来たという理由で、ヤコブになります。この「ヤコブ」には別の意味、「神が守りたまわんことを」という意味もあります。さらに彼らは後に「イスラエル」という名前を神の使いから賜ります（三二・二九）。イスラエルという国の名前はここから生まれたのです。

### 3 長子の特権

さて今日の箇所には、もう一つきわめて重要なエピソードが伝えられています。弟であつたはずのヤコブが、長子としての権利を兄から買い取った、そして自ら神の約束の担い手となつたことです。

二人の子供は成長します。しかし聖書の言葉からは、緊張・対立をはらんだ家庭の雰囲気伝わってきます。

二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人で野の人となつたが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩りの獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した（二七〜二八節）。

緊張は、第一にエサウとヤコブの間にあります。更に父イサクと母リベカとの間にもあります。

エサウとヤコブ、仕事の違い、性格の違い、それ以上に、ここにはもっと大きな生活文化とその変化が反映しているといわれます。

一般に人類は採取・狩猟生活から、一つところに住み着いて農耕を営む生活へと進んできました。この箇所には、その人類の二つの生活様式が混在していた時代のことの反映しているのです。狩猟から農耕へ、逆戻りはありません。後者の農耕生活者から見れば、狩猟に従事する人は野蛮で不気味な存在に見えたのです。そうした視点から、エサウとヤコブの関係も描かれているように見えます（フォン・ラート）。イサクもそうです。イサクがエサウを愛した理由が、「狩りの獲物が好物だったから」と書いてあります。しかしこれはイサクが安定した農耕生活の豊かさに与っていることを示しています。時々エサウがもってくる肉がおいしかったというのは、狩りだけに

頼っていない人の余裕の表れです。

イサクとリベカの間の緊張は、父親が兄を愛し、母親が弟を愛したというところに暗示されています。ただイサクがエサウに愛したのは肉をもってくるからという理由だったので、リベカのヤコブへの執着とは違うようです。彼女の愛は密かなもので、それゆえ激しく強いものでした。

そうした中であることが起こります。ヤコブがエサウから「長子の権利」を買い取ったということです。新共同訳は「譲る」という言葉を使っていますが、正しくは、売る、買うです。

今日の箇所の後半に語られている事件は、ヤコブだけでなく、母リベカが入れ知恵したようにも見えます。

狩猟生活は不安定なものでした。獲物がなければ、ここに描かれているエサウのようになるのです。お腹を空かして帰って来ます。いま腹を満たすこと以外のことは何の価値もないのです。後の律法では、長子は二倍の遺産相続をします（申命記二一・一七）。そんなこといまの彼にとつて何でしょうか。それをヤコブは見透かし、長子権を買い取ることに利用したのです。

ただ誤解してならないのは、長子権の売り買いというのは、実際には行われていたことです（一五・二）。違法ではありません。

それでも、後になって、エサウは、ヤコブに、二度までも欺されたといつて、その一つに長子の権利を奪われたことを上げています（二七・三六）。しかし、もし欺した・欺されたということなら、違うところにそれはあるようです。最後のところ、聖書の総括は、こうなっています。

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった「売り渡した」。ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去つて行った。こうしてエサウは、長子の特権を軽んじた（三二～三四節）。

帰宅したエサウが、「その赤いものを、その赤いものを食べさせてほしい」と懇願します。狩りを生業（なりわい）とするエサウが、赤いものを見て、血のしたたる動物の肉のスープだと勘違いした可能性があります。ヤコブが煮ていたのは、レンズ豆でした。エサウが悪いのか、ヤコブがうまかったのか、それは分かりませんが、欺いたといえば欺いたのです。

エサウの振る舞いが、聖書がここで評価を下しているように、長子の特権を軽んじたこととして非難に値することはよく分かります。長子の特権とは、たんに二倍の遺産を受け継ぐということではありません。アブラハム、イサクと受け継がれた、受け継がれて行くべき、まさに神の祝福でした。それを「一杯の食物のために」軽んじたとヘブライ人への手紙は断じています（一二・一六）。

ヤコブはどう評価されるべきでしょうか。この段階では評価は控えておきたいと思えます。長子の特権にともなう、主なる神の祝福に、彼は、何が何でも与ろうとしたのです。神はヤコブを選び（ローマ九・一一～一二）、彼によって、いま、すべての国民に祝福をもたらしそうと働き始めたのです。

（二〇二二年九月四日）